

博士学位論文概要書

初期瑜伽行派におけるヨーガ理論の形成：

『瑜伽師地論』「声聞地」の研究

阿部貴子

1. 論文の目的

本論文はインド初期瑜伽行派を代表する論書『瑜伽師地論』「声聞地」(*Śrāvakabhūmi*、以下『声聞地』)におけるヨーガ理論が、どのように形成されたのかを探るものである。瑜伽行派は一般に説一切有部に属していたヨーガ実践者や、彼らと密接に関係する人々によって成立したと言われている。しかしながら、その思想的・実践論的背景はいまだ明確には知られていない。そのため、本論文は『声聞地』の著作に関わる人々の活動背景を含め、その理論形成にいかなる経論の影響があり、どのように自説を組み立てたのかを考察する。なお『声聞地』のヨーガ理論とは、ヨーガすなわち止観を中心とする禅定方法と、その実践者たちの道のりとの両方を指すものとする。

本論文の序論では、先行研究によって明らかになっていることと、検討の余地のある問題を以下のように設定した。章構成とは異なるが、結論においてはこれらの項目にまとめて私見を提示した。

- (1) 禅経典との関連性
- (2) 初期阿毘達磨論書との関連性
- (3) 『サウンダラナンダ』との関連性
- (4) 『声聞地』と譬喩者／経量部に関する問題
- (5) 『声聞地』の用いる阿含経典
- (6) 『声聞地』の独自性
- (7) 『声聞地』の新古層と各瑜伽処の成立

2. 主な使用テキスト

本論文で使用する『声聞地』のテキストは以下のものである。筆者は大正大学声聞地研究会にてテキスト校訂と和訳に携わってきた。本論文で使用するテキストは主に同研究会の成果に基づく。

- ・『瑜伽師地論聲聞地梵文原文影印本』(大正大学・中国民族図書館) 1994.
- ・Karunesha Shukla, *Śrāvakabhūmi of Ācārya Asaṅga*. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute. 1973.
- ・『瑜伽師地論』 T. 1579.
- ・西藏大蔵経 Derge Edition. No. 4036. Peking Edition. No. 5337.
- ・声聞地研究会 (大正大学総合仏教研究所)

- 『瑜伽論声聞地 第一瑜伽処—サンスクリット語テキストと和訳—』山喜房佛書林. 1998.
- 『瑜伽論声聞地 第二瑜伽処 付 非三摩呬多地・聞所成地・思所成地—サンスクリット語テキストと和訳—』山喜房佛書林. 2007.
- 『瑜伽論声聞地 第三瑜伽処—サンスクリット語テキストと和訳—』山喜房佛書林. 2018.
- ・Florin Deleanu, *The Chapter on the Mundane Path (Laukikamārga) in the Śrāvakabhūmi, A Trilingual Edition (Sanskrit, Tibetan, Chinese), Annotated Translation, and Introductory Study*, 2 vols. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies. 2006.

3. 本論文の構成と各章の概要

本論文の構成と、本論各章の概要は以下の通りである。

序論

- 第1章 『瑜伽師地論』研究に関する概要
- 第2章 『声聞地』の先行研究と問題の所在

本論

第I部 『声聞地』のヨーガ体系

- 第1章 『声聞地』における yogācāra
- 第2章 止・挙・捨と止観の関係: 転依思想の形成に関連して
- 第3章 「第一瑜伽処」の修行道:
『法蘊足論』『サウンダラナンダ』および譬喩者/経量部節との関連性
- 第4章 「第二瑜伽処」を中心とした『法蘊足論』との関連性
- 第5章 止観に関する「第二瑜伽処」と「第三瑜伽処」の比較

第II部 五停心観の考察: 阿含經典・阿毘達磨論書・禪經典との比較

序章 先行研究と研究方法

- 第1章 不浄観
- 第2章 慈愍観
- 第3章 縁性縁起観
- 第4章 界差別観
- 第5章 入出息念

結論

附論

- 附論1 『瑜伽師地論』「思所成地」体義伽陀と『声聞地』: 部分テキストと和訳
- 附論2 『禪秘要法経』における不浄観と浄観
- 附論3 『梵文瑜伽書』(Yogalehrbuch) の入出息念: 初期密教文献との関連
使用テキストと略号および参考文献

本論の第I部第1章では、yogācāra の用例から『声聞地』の作成意図を探った。yogācāra の用例の多くは『修行道地経』などの禅経典に見られる概念に基づいているが、「第二瑜伽処」の『レーヴァタ経』引用箇所には新たな yogācāra の定義を示す。このことから著作の過程で新しい yogācāra の理論構築を強く意識するようになったと論じた。第2章では『声聞地』を貫く止観が『増支部経典』「金工師経」（『雑阿含経』1246, 1247 経）の止・拳・捨に由来することを述べ、この経典を一つの要素として転依思想を構築した可能性のあることを指摘した。第3章では「第一瑜伽処」の内容について『法蘊足論』『サウンダラナンダ』および『成実論』の譬喩者／経量部の所説を比較し、特に「第一瑜伽処」の種子説、纏と随眠説について論じた。第4章では『声聞地』と『法蘊足論』の共通点を考察し両者に強い関連性のあることを指摘し、第5章では「第二瑜伽処」と「第三瑜伽処」における止観理論の相違点を考察した。

第II部の序章から第5章はすべて「第二瑜伽処」「第三瑜伽処」に説かれる観すなわち五停心観に関する考察であり、不浄観・慈愍観・縁性縁起観・界差別観・入出息念の各々について、引用または依拠している経典を探り、禅経典と阿毘達磨論書との比較を行い、そこから浮き彫りとなった『声聞地』の独自性を論じた。

4. 結論

ここでは、本論の考察によって得られた結論を、序論で提起した問題に従って述べる。なお、本概要では煩雑さを避け先行研究を註記しない。

(1) 禅経典との関係性

『声聞地』は *Yogācārabhūmi* という名称も含めてその修行体系が『修行道地経』と一致すると論じられており（Paul Demiéville、荒牧典俊、Florin Deleanu、山部能宜）、『達磨多羅禅経』『坐禅三昧経』との共通点も指摘されてきた。本論文でこれらの比較をした結果、yogācāra に三段階を設ける点や、『相応部経典』「国土経」の油鉢の譬喩を挙げて yogācāra の心得を強調している点（I.1）、また「第二瑜伽処」「第三瑜伽処」に説かれる五停心観の構成については、『修行道地経』との関係が最も密接であることが分かった（II.序章）。しかしながら同時に、五停心観の個々の解説や列挙される項目に関しては、『修行道地経』との共通点はほとんど見られないことも明らかとなった（II.1-5）。

(2) 初期阿毘達磨論書との関連性

では、何によって五停心観の詳細を説いたのかというと、多くは阿毘達磨論書によっている。「第二瑜伽処」の不浄観においては、『中阿含経』「念処経」や『雑阿含経』1165 経を用いて説明するが、その細部を補強するために『法蘊足論』『婆沙論』などと共通する項目を示している（II.1）。慈愍観では『中阿含経』「馬邑経」などに見られる経文を挙げるが、直接の典拠としては『法

蘊足論』『婆沙論』に引用されるものによっている(II.2)。界差別観では、『中阿含経』『界分別経』に基づきつつも『婆沙論』と最も近い項目を列挙し(II.4)、入出息念では『中部経典』『入出息念経』『雑阿含経』803経を用いて解説するが、その項目は『婆沙論』と近似し、『婆沙論』の解説が無いと理解できない文章のあることも分かった(II.5)。そのため、「第二瑜伽処」は有部の経典解釈や法数項目を熟知した者により著作されたといえる。

また今回の研究により、『声聞地』はその構成や理論の極めて重要な部分で『法蘊足論』に基づくことが分かった。「第一瑜伽処」の構成に共通点が見られるほか(I.3)、「第二瑜伽処」の三十七菩提分法の解説では『法蘊足論』と近似する説明が散見された。さらに筆者がこれまで『声聞地』の特徴と捉えてきた概念のほとんどが『法蘊足論』に見出せる。すなわち、止観の九種心住と四種観察の定義は『法蘊足論』の所説と一致する。また、麁重を離れて軽安を得ること、経量部説とされる本無今有説、五停心観における名称の観察(観待道理)、止観における光明想も、『法蘊足論』に言及されている(I.4)。以上から『声聞地』は、『修行道地経』『サウンダラナンダ』のみならず、『法蘊足論』の修行論に大きな影響を受けているといえる。

(3) 『サウンダラナンダ』との関連性

馬鳴作『サウンダラナンダ』には『修行道地経』などの禅経典と共通点があり、譬喩者／経量部に所属することが指摘されている(松濤誠廉、本庄良文)。一方『声聞地』との近似性についても、「第一瑜伽処」の構成、五停心観の骨格、本無今有説に関して論じられてきた(山部能宜、小谷信千代、本庄良文)。本論文では、『声聞地』が「金工師経」の止・挙・捨を根幹とした止観の方法論を示し『サウンダラナンダ』でもこれを大きく扱っていることから(I.2)、改めて両者の関連性を確認することができた。

(4) 『声聞地』と譬喩者／経量部に関する問題

では経量部との関係をどのように捉えるべきか。経量部を自称する世親は、『俱舍論』執筆時すでに瑜伽行派の立場に立っていたと指摘されている(Robert Kritzer、原田和宗、山部能宜)。一方、世親と経量部とりわけ『順正理論』のシュリーラータ説との関係を主張する説もある(Changhwan Park、福田琢)。こうしたなか学界では、世親の所属が瑜伽行派か経量部かを問うまえに、『瑜伽師地論』最古層の『声聞地』が経量部とどう関わってきたのかを解明することが必要とされてきた。そこで本論文では経量部の前身をひとまず譬喩者／経量部と称して、『声聞地』が『成実論』の譬喩者説、『順正理論』の経量部説とどのように関連するかについて考察した。

第I部では「第一瑜伽処」種姓章を考察し、山部能宜の指摘通り世親の経量部説が『声聞地』に遡れることを確認した。しかし、世親や経量部が種子と芽の譬喩を多用するにもかかわらず、『声聞地』『瑜伽師地論』ではその譬喩をほとんど説いておらず、『声聞地』の種子説は極めて唐突で説明的である。したがって『声聞地』は(Parkの指摘通り)経量部やそれ以前の分別論者がすでに議論していた概念を借用したと考えられる。つまり、ただ世親と経量部の関係が密接なのでは

なく、『声聞地』と譬喩者／経量部はすでに交流し、議論を共有していたことを意味している (I.3)。

また『声聞地』「第一瑜伽処」では根・境・識の同時生起説を説くが、『成実論』と『順正理論』のシュリーラータは次第生起説を取る。世親は『俱舎論』で『声聞地』も引用する『人契経』 (*Mānuṣyakasūtra*) を用いて同時説を主張しているため、『声聞地』と世親の共通性を見ることが出来る (I.3)。さらに「第四瑜伽処」では、纏と随眠を区別し、随眠を断じて阿羅漢を得ると説く。『成実論』では纏と随眠を区別していないがシュリーラータは纏と随眠を分けており、この点で世親と経量部の共通性が指摘されていた。しかし『声聞地』の時点ですでに纏と随眠が区別されており、経量部や世親の随眠説の先駆形態を『声聞地』に求めることも出来る (I.3)。以上のことから、『声聞地』は経量部説と同様の説と異なる説の両方を持つが、異なる説においても世親との共通性が見られることが分かる。こうした点で、世親はより瑜伽行派の立場に近いといえるのではないだろうか。

ただし、第 II 部で論じたように、五停心観や止観について『声聞地』と『俱舎論』は大きく異なっている。さらに『成実論』との共通点もほとんど見つからなかった。ヨーガの実践論については、譬喩者および世親もそれぞれ異なる方向性を持っていたといえよう。

(5) 『声聞地』の用いる阿含経典

『瑜伽師地論』「思所成地」「摂事分」が有部所伝の『雑阿含経』を引用することは知られており (Lambert Schmithausen、榎本文雄、向井亮)、『声聞地』についても『雑阿含経』やより古い『中阿含経』からの引用が指摘されているが (声聞地研究会、Chung & Fukita)、本論文では新たに引用経典を指摘することができた。

またこのうち特殊な例は、縁性縁起観の説明に用いられ『雑阿含経』に含まれる『縁経』 (*Pratītya*)、『縁起経』 (*Pratīyasamutpādādivibhaṅganirdeśasūtra*)、『勝義空性経』 (*Paramārthasūnyatāsūtra*) である (II.3)。これらは、世親が経量部として支持する経典である。だが『法蘊足論』はすでに『縁経』『縁起経』を引用し、『勝義空性経』の本無今有説に言及している。すなわち『婆沙論』以前の古い有部において支持されていた経典に、『声聞地』や『俱舎論』が依拠しているといえる。

(6) 『声聞地』の独自性

以上の検討をふまえて、『声聞地』の独自性としてまず挙げられるのは転依説であろう。すでに論じられるように (佐久間秀範)、転依説は『声聞地』が初めて導入した概念である。本論文で示したことは『声聞地』のなかでの展開である。「第三瑜伽処」では、止観 (止・挙・捨) によって身心の僣重を離れ (*vi-√gam*)、軽安を得ることを転依とするが、「第四瑜伽処」では初静慮から第三静慮で軽安を得て、阿羅漢位に達する際に僣重の種子を根絶 (*sam-ud-√han*) するという。そして「第二瑜伽処」所縁章では軽安の獲得を説かず、僣重を鎮静 (*prati-pra-√śrambh*) することにより転依を得ると明示し、『レーヴァタ経』を経証としてそれを大々的にアピールした。すなわち「第二瑜伽処」では、第三静慮までの静慮と結びついた軽安という概念を用いず、教理上の整

合性をつけた転依説を構築したといえる。

また、これまで指摘されてこなかったが、「金工師経」の止・挙・捨の譬喩が転依説に大きく影響を与えたと考える。金工師が金を熱し、冷やし、見守ることによって、堪能でどのような装飾品にも相応しい素材とするように、行者も止・挙・捨を実践して身心を堪能にし涅槃に適したものにさせる。元来止観は止・挙・捨と結びついた概念ではなかったが、『声聞地』は両者を統合させ、これによる転依を考案したと推測できる。

第二には種子説である。「第一瑜伽処」種姓地の所説は、前述のように譬喩者や分別論者の議論を取り入れたものであろう。だがそれを『声聞地』のなかで自説として醸成していった。この展開には、纏と随眠の思想も大いに関わっている。「第一瑜伽処」では顕在的な纏と、依り所に付着する潜在的な随眠という区別を説き、「第二瑜伽処」では四正断の修行によって纏と随眠とを段階的に断ずることを説く。そして「第四瑜伽処」出世間道では、随眠を僦重と見なしその種子を根絶して阿羅漢を得ると述べている。「意地」「撰事分」では「種子は随眠」であり「種子の依り所が転ずる」と明示されており、これが種子と随眠と転依の関係を示す最も古い言及箇所とされてきたが、この思想の素地は明らかに『声聞地』のなかで形成されたといえる。

第三に、十二縁起の二因説を説いたことも特異である。すでに諸先学には指摘されている通り（松田和信、Robert Kritzer、原田和宗）、『声聞地』は「(来世を) 引發する因」として、行～受支を来世の種子と見なし、「(来世を) 生起する因」として愛・取・有を挙げる。ここに種子と識を結びつける考え方は見られないが、「有尋有伺等三地」や『阿毘達磨集論』における二世一重説の基礎を築いたことは明らかである。

第四に、「第三瑜伽処」に説かれる五停心観の理 (yukti) の方法である。なかでも観待道理が特徴的であり、不浄観などで個々の対象を捉えたのちにその対象は「名称 (saṃjñā)、仮名 (prajñapti)、言説 (vyavahāra) が付くのみ」と観察する。ただし、この観察方法は『声聞地』のオリジナルではなかった可能性もある。『法蘊足論』には、四正勝や四神足の説明の末尾に観察対象を「名・想・言説」と見ることを示しており、『成実論』では四大をはじめあらゆる事物を仮名 (prajñapti) と見ることを主張する。このような捉え方が『声聞地』に影響を与えたのではないだろうか。『菩薩地』「真実義品」では事物に対する想 (saṃjñā) が除遣されると離言の自性を了知すると述べており、この理論基盤は『法蘊足論』『成実論』を背景とした『声聞地』にあるといえるだろう。

第五に、影像と勝解を挙げておきたい。「第三瑜伽処」では、行者は観察すべき事柄と同分の影像を対象として、それを繰り返し勝解し、除遣し、光明想をもってより明瞭にしていくという。この影像に対する勝解の方法は、「第二瑜伽処」にいたると転依への修行と明示され、『解深密経』における唯識説の基盤となる。ここで改めて勝解の意味が重要になる。勝解作意について『婆沙論』では増益（無いものを有ると見ること）であると説明し、『順正理論』では譬喩者や瑜伽師の説く勝解について『幻網経』(Māyājāla) を用いて「非有を境とすること」と説明している。『声聞地』はこうした勝解作意の実践から影像説を立てたといえるだろう。

最後に、阿頼耶識説導入の背景について私見を述べると、Schmithausen が阿頼耶識の初出を「三

摩呬多地」の滅尽定に求めたことはよく知られている。滅尽定中にも身体が維持されることを述べた箇所であるが、『中阿含経』『法施比丘尼経』の経典解釈上の問題として導入されたという。だが山部能宜は、身体を生理的に維持するという側面と、身体的感受という側面こそが阿頼耶識導入の根底となっていると述べる。『声聞地』はもちろん直接的に阿頼耶識に結びつく文言を示してはいないが、僣重や軽安をもつ身心や依り所を強調し、界差別観では識界とは別に六界を執受する心的な存在を示唆しており、身心を維持する何らかの存在を想定していたことが窺える。一方『声聞地』でも「法施比丘尼経」の同文を引用するが、滅尽定には一切言及しておらず、滅尽定が阿頼耶識導入の最初のきっかけになったとは『声聞地』からは読み取れない。

(7) 『声聞地』の新古層と各瑜伽処の成立

最後に『声聞地』の四瑜伽処の成立について述べておきたい。『声聞地』の成立については、新古層が複雑に絡むものの、概して「第三瑜伽処」「第四瑜伽処」の『修行道地経』と重なる部分が古層であり、それ以外の箇所と「第一瑜伽処」「第二瑜伽処」が後に作成されたと言われてきた(荒牧典俊、Florin Deleanu)。ただし「第一瑜伽処」の構成は阿含経典に基づいたもので『サウンダラナンダ』と近似し(I.3)、「第二瑜伽処」にも『法蘊足論』との共通点が散見される(I.4)。また「第二瑜伽処」は五停心観の個々の対象を解説するが、「第三瑜伽処」はそれを省略して六事(義・事・相・品・時・理)といった独自の方法論を主張する。確かに『修行道地経』と重なる部分は『声聞地』の骨格とも言えるが、そのみを古層と言えるかは再検討しなくてはならない。

また、『声聞地』は冒頭でA種姓地 B趣入地 C出離地の構成を設定するが、不自然にもC出離地の途中で「第二瑜伽処」から「第四瑜伽処」までを説く。もし『修行道地経』による五停心観を土台に「第三瑜伽処」「第四瑜伽処」を先に著作したのであれば、なぜそれをC出離地の途中に配置したのであろうか。

推測の域を出ないが、瑜伽処に応じた分業が為されたとも考えられる。「第一瑜伽処」は阿含経典や『サウンダラナンダ』から素材を取り、比丘としての素質や日常的修行を網羅する。これに続いて、「第二瑜伽処」は五停心観と菩提分法を阿毘達磨論書の所説を用いて解説したのであろう。「第三瑜伽処」では『修行道地経』に基づく五停心観を挙げながら、「第二瑜伽処」には無い独自の実践方法(止観、四種道理、勝解・真実作意、影像、除遣、僣重の除去)を説き、「第四瑜伽処」では世間・出世道を説明した。そして最終的に「第二瑜伽処」の所縁章で『レーヴァタ経』を用いて瑜伽行者の止観による転依を打ち出したと推察できる。

以上、『声聞地』の作者あるいはその成立に関わったヨーガ実践者たちは、有部の内部にいてその経典と阿毘達磨を熟知していた。それとともに主流派とは異なる分別論者や譬喩者や瑜伽師たちと交流し、彼らの依拠する経典やヨーガの口頭伝承を共有していた。こうしたなかで『声聞地』の作者たちは、一人の求道者の出家から修行までを示した『サウンダラナンダ』や『法蘊足論』を強く意識しつつ、新しい *yogācāra* を掲げ、止観と五停心観に基づくヨーガ理論の体系化を図ったと考える。以上が本論の概要である。

5. 附論

なお附論として、瑜伽行派および有部のヨーガの展開に関連する3本の論文を付けた。

附論1では、「思所成地」体義伽陀 (Śarīrāthagāthā) とその註釈部分に見られる止観について検討した。註釈部分はこれまでまとまった校訂テキストが発表されておらず、研究もほとんどなされていない。本研究により体義伽陀は『声聞地』の内容を知りつつも、最終的にはそれより先に作成された可能性のあることを指摘した。また、考察した部分のみテキストと和訳を付した。

附論2では、中国成立(5世紀頃)とされる『禪秘要法経』の不浄観を考察した。すでに先学により研究されているが (Eric M. Greene)、伝統的な有部の不浄観に基づきつつも、観察過程で白骨を光明と見て念仏観を行い、自らの身体に金剛や灌頂を見るといった独特な方法を示していることを述べた。

附論3では、中央アジアで発見されたサンスクリット文献『梵文瑜伽書』(Yogalehrbuch) を取り上げ、その入出息念を考察した。『声聞地』の入出息念と同じ十六段階の次第を挙げながら、その視覚イメージは特異であり、多くの描写で『禪秘要法経』『治禪病秘要法』と共通することが指摘されてきた (山部能宜)。本章では新たに、油の灌頂や弥勒と過去七仏を説く点から、『弥勒大成仏経』や初期密教文献とも見なされる『観薬王薬上二菩薩経』『孔雀経』『請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪経』との接点を指摘した。これにより、有部や瑜伽行派に由来する観想方法が後世に与えた影響を見ることができた。

以上